

もくぞう あ み だ によらいざぞう
木造阿弥陀如来坐像

<概要>

員数	1 軀 ^く
法量	像高 81.5 cm
時代	平安時代 (久安 2 (1146)年) ^{きゅうあん}

本像は、^{たいきゅうじ}退休寺の本尊である。尾張徳川家二代目藩主の徳川^{みつとも}光友により^{かし}下賜されたと伝えられる。平成 28 (2016) 年の調査で、像内背部より^{ぼくしょめい}墨書銘が見つかり、久安 2 (1146) 年に^{えいちょう}僧永澄らによって尾張国^{なかしま}中嶋郡北条^{ときしま}鶴嶋郷（現在の愛知県一宮市時之島）で造立開始された像であることが明らかになった。

当時流行した^{じょうちょうよう}定朝様^(※)の特徴をもちつつも、脚部正面に垂れる衣のU字形がごく浅く、また衣の一部を^{すね}脛の下にたくし込むなど、着衣の表現が中央作の如来形とは異なることから、流行の仏像の制作に慣れない地方仏師の作と考えられる。

愛知県内では数少ない平安時代の^{ざいめいぞう}在銘像であり、尾張国で制作されたことも明らかである。尾張地方における久安 2 年の基準作例として美術史的な価値も高い。

定朝様^(※) 平安時代の仏師定朝にはじまる和様の仏像彫刻様式で、平安時代後期に流行した。瞑想的な表情、彫りが浅く平行して流れる衣文などに特徴がある。



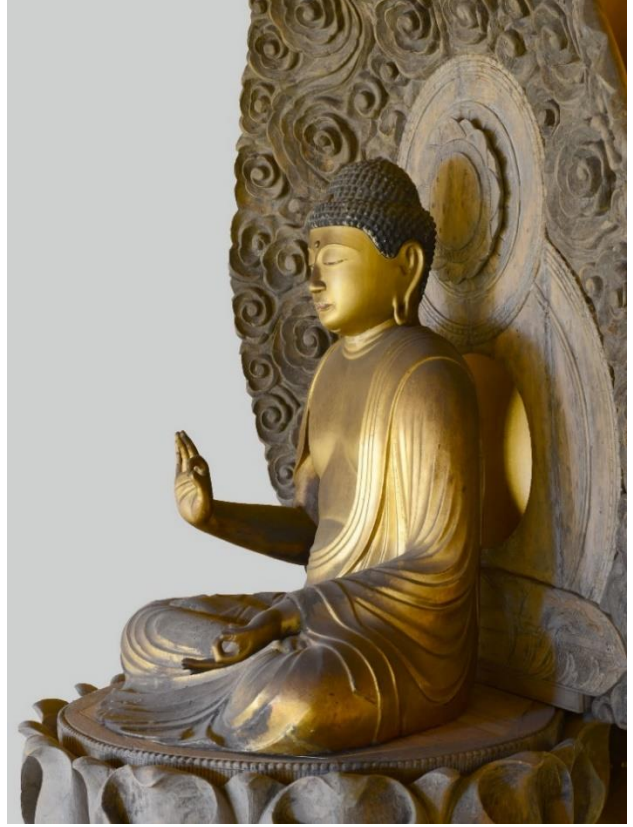
木造阿弥陀如来坐像（正面）



木造阿弥陀如来坐像（全体）



木造阿弥陀如来坐像（右斜側面）



木造阿弥陀如来坐像（左斜側面）



木造阿弥陀如来坐像（像底）